歌とストーリーが交わる奇跡

亜差覇蚊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歌とストーリーが交わる奇跡

【Ｎコード】
Ｎ０６６３Ｓ

【作者名】
亜差覇蚊

【あらすじ】
ここはＶＯＣＡＬＯＩＤの歌がストーリーになる場所
ＶＯＣＡＬＯＩＤの歌にそったストーリーを少しずつ書いていこうと思います
だから恋愛ものもあれば馬鹿なやつとかも多々ありますよ
亀更新になると思いますがよろしくっす

初めての恋が終わるとき（前書き）

まず第一曲目として［初めての恋が終わるとき］です

私が1番好きな曲です

ストーリーに出るキャラ

主演初音　ミク

鏡音　レン

鏡音　リン…お休み

巡音　ルカ…お休み

初めての恋が終わるとき

ＡＭ．６：００

私はカーテンの間から差し込む光に起こされた

「まだ６時かぁ……眠いけど～二度寝したら余計に眠くなるし…何より今日はあいつの…」

誰に言うでも無くぼんやりと壁に掛かるカレンダーを見る

そのカレンダーには一日だけ、今日の日付だけわかりやすく赤いボールペンで丸印がされている

「起きよ……」

私は一度ぐっと体を伸ばすとベッドから飛び出す

そしてハンガーにかけておいた服に着替え下に降りる

「おはよ…お父さん」

その最中洗面所から顔を出した父親と顔を合わす

「おはよ…ミク、今日は早起きだな」

「まぁね……あいつの最後の日だから」

「そうか…今日はレン君の…」

そう。今日は１２月２４日…今年のクリスマスイブは高校でずっと

仲がよかったやつが夢を追いかけて巣立って行く日
私はそれの見送り…

「レン君とは何時に？」

「一応８時半だよ…多分あいつ遅刻するだろうけど…」

「淋しくなるなぁ…いい子だったのに」

父親は遠くを見つめるような目をしながら言った

「うん…」

私も少し俯きながら言い返す

私は初音ミク。つい先日高校を卒業したばかり
私達の高校は時間がおかしいのかこの時期に卒業する
それで高校になって出会った、鏡音レンが上京することになった。
今日はそれのお見送りだ

私は朝食にパンを二枚焼き、ベーコンエッグを二人分焼く
それらを皿に乗せてテーブルに運ぶ

「お父さん。先食べるよ」

「あぁ～」

父親が洗面所辺りから声を張り上げる
今日母親は仕事の夜勤で今は家にいない

だから代わりに私が家事をする

私は手早くパンとベーコンエッグを平らげ、皿を台所に持って行った。

その後自分の部屋に鞄を取りに向かった

「今日でお別れか…」

ミクは机の上に置かれた写真立てを手にとる

それに写っているのは修学旅行先で撮った一枚

「私とルカとリンと…レン」

ミクはしばしの間その写真を見つめ、気がおさまるとそれを元に戻した

そして机の上に置いてあった紙袋を鞄に入れた

「よし…行くか」

時刻は8時17分…調度いいくらいだろう

「お父さん…行ってくるね」

「気をつけてな…レン君によろしくな」

「うん」

そうして家を出た私は待ち合わせ場所の公園に向かった

「う～さぶっ…やっぱりまだ来てないか」

私は少し早くついてしまったようでベンチに腰掛ける
「早く来いよな～レンのやつ～」
その時だった
ミクの頬っぺたに熱いものが障った
「熱っ」
慌ててその方を見るとレンが笑いながら立っていた
「待たせて悪かったな」
「ほんと…このコーヒーはお詫びにもらってあげる」
「ほいよ…ハハッ」
「ハハハ」
二人は朝早くから笑い出す
「で？今日はどうすんの？」
「特に行く宛てはないんだがなぁ…」
レンは腕を組ながら考え出す
「今日はあんた最後の日なんだから思い出作りでもしたら？」

「それもそうか…なら今日は俺の思い出作りに付き合ってもらうからな」

「はいはい…（こうして笑い合うのも今日が最後…）」

私は自分で沈み込んでいるのがわかった
わかったから逆に振る舞った。気づかれないように

「にしても今日で最後なんだな」

レンが1番気にしている事をさらっと口にする

「しっかり目に焼き付けとかなきゃな」

レンは来た道を振り返る

「そうそう…（私も焼き付けとかなきゃな）」

二人は街に来た
なぜだか話す事もなくゆっくりと
今は9時36分、そろそろデパートやらは開店の準備をしだす頃だ

「この時間帯って何があるんだ？」

「そんなこと私に聞かないでよ～」

他愛もない会話
これも今日が最後

「まぁ適当にぶらつくか」

「いいんじゃないの？それで」

二人はまだシャッターが閉まる街並を歩き続けた

「そうだ…朝飯食べたか？」

「私は食べたけど…食べてないの？」

「あぁ～食べてたら遅刻しそうだったからな」

「なるほど…ならマック行く？」

「おぅ」

二人は近くにあるマックに向かうことにした

「どれにしようか……よし、これで～コーラで」

レンが注文を言い終え財布を取り出そうとしたのを、遮る様にミクがお金を出す

「私からの餞別…何もしてなかったし」

「ありがと…」

ミクとレンは二人席に向かい合う形で座る

レンはトレイに乗るハンバーガーやポテトを頬張り出す

「ミクは食べねぇの？」

「私は～いいよ」

「ポテト食べるか？」

そういいつつレンはポテトを差し出してくる

「じゃぁ少しだけ」

ミクはその中から数本ポテトを抜き取るとゆっくり食べはじめた

「ふぅ食った食った」

レンはハンバーガーの包み紙を丸めながら言った

「そろそろ色々開いてるんじゃない？」

「そうだなぁ…行くか」

レンはトレイを手に取り立ち上がる

ミクもそれに合わせて立ち上がる

「さて…まずは……何しようか」

「え～」

レンはあまりこういう先導して何かすると言うキャラではなかった

どちらかと言えば皆についていく方が多かった

「どうすんのよ」

「とりあえずさゲーセンでプリクラ撮らねぇ？」

「プリクラねぇ」

ミクは渋々了承するとすぐにゲーセンへの道を辿る

「朝早くからいるのね」

ミクはゲーセンの中で格ゲーやら音ゲーやらをやっている人達を見ながら言った

「まぁ今日は日曜だしな」

レンはプリクラ機を探しながら応えた

「ミク～これならいいんじゃね？」

「うん」

ミクとレンは一台のプリクラ機に入るとお金を入れ、背景を選ぶ

「よし…ミク何か面白いことやれ！」

「何いきなりな無茶振り！？」

「ハハ…冗談！撮るぞ」

二人はプリクラ機から出されたシートを見つめながら笑う
そのシートを半分にし、一枚ずつと分ける
「これは最高の思い出だな」
レンは撮ったばかりのプリクラを眺めながら言った
「私なんかでいいの？」
皮肉に笑ってやる
「あぁ」
案外に真面目な返答につい困ってしまった
「まぁこれで私は忘れられることはないわね」
「忘れるかよ…皆の事もミクの事も」
「そう」
それからゲーセンでエアホッケーをやったりリズムゲーやったり
少し遊んだ
レンはゲームに関してはなかなかな腕前でリズムゲーは不覚にも
完敗
「次は～そうだ！服見たいんだ」

ゲーセンの扉を出たレンはすぐに次の目的地を言った

「デパート？」

「いや…行きつけの店」

「そんなのあるんだ…」

「あぁ…結構かっこいいのあるんだぜ」

レンが任せなさいみたいな雰囲気で先導する
今思えばレンが先導して何かするのは初めてだった

「ここだ」

それはゲーセンから程近くにあった
路地裏が入口なだけあり、なかなかひっそりとしているが店頭は明るく服が並べられていた

「おっレン君おはよ」

店員さんがレンに声をかける

「おはよう…ちょっくら出る前に寄ったんだよ」

「そうか…今日か～早いな、あれ聞いたの一月前だったか？」

「そんくらいですね…早いもんで」

レンは少し日にち計算をしてから答える
「てか来てくれてよかった～これ」
はいと店員が差し出したのは少し大きめの紙袋だった
「なんすか？これ？」
レンは例によって困惑する
「いいから開けてみな」
「？……え？これ前から欲しかったジャンパーじゃん」
「私からの餞別。しっかりやるんだよ」
店員さんがおどけてみせる
「でも…何か悪いっすよ～」
「子供が遠慮なんかしない…私からのプレゼントだから気にしないの」
店員さんは少し強引に押し付けるように言った
「なら…お言葉に甘えて」
レンがちょこっと頭を下げる
店員さんは笑った

「ミク…もう一着服見よう」

「うん…いいよ」

二人は店内に入り、服を見ながら歩き回った

時折めぼしいものを出しては合わせて、似合わなかったら笑ったり、かっこよかったら相槌うったり

「ねぇこれかわいくない？」

そう言ってミクが取り出したのはシルバーのシャツに緑のネクタイとスカートがセットになった服だった

「おぉいいじゃん」

「可愛いんだけどなぁ」

ミクは値札と財布を見比べ、落胆する

「私違う方見てくるね」

そう言ってミクは出口の方へと走り去って行った

それからちょっとしてレンが中から出てきた

「待ったか？」

「そんなに」

「なら行こうぜ」

「うん」

それからお昼ご飯を食べ、デパートに行き財布や帽子を見たり
そんな他愛ない時間を楽しんでいるとあっという間に日は暮れていた

「もう日落ちちまったな」

レンがデパートの屋上から夕焼けを眺める
ミクもその横から同じ方向を眺める

「うん…もうすぐお別れか…」

ミクは色んな事を思い出していた
レンとの出会い、レン達と遊んだ日々、色々な思い出が甦ってきた

「そろそろ…駅に向かうか」

二人はデパートから出ると駅までの道を歩きだす

「夜になると明るいね」

「確かにな…木も葉っぱ落ちてんのにネオンつけて光ってるしな」

「うん…ピッカピカ光ってる……」

そんな時向から来るカップルが手を繋ぎながら、空を見上げていた

「見てみて初雪だよ」

「ほんとだな…雪なんていつ以来だろ」

カップルが言ったとおり空からは白いフワフワがいくつも落ちて来ていた

「雪だね…」

ミクはその一つを手に乗せる
するとそれはすぐに溶けてなくなった

「寒くなるな…」

レンが欝陶しそうに前髪を払う

「ハハ…（あの二人みたいになりたかったな……）」

ミクはそう思いながら鞄の中の紙袋を触った

「ついちまったな」

レンの一言で現実に引き戻された
目の前には大きな西洋風の建物
これがこの街の駅

「行こうぜ」

レンが手招きする
ミクはそれについていく
「今日あっという間だったな」
レンが今日の感想を呟く
ミクは半分上の空で聞いているのかいないのかわからないような状態だった
「でも…毎日楽しかったよ…」
レンは名残惜しそうに下を向き、話す
「私も楽しかった…レン達といれる毎日が楽しかったよ」
ミクは言える言葉を言った
これがミクの今言える言葉だった
「それならよかったよ…」
レンは改札口で自分の分の乗車券とミクの分の特別券を発券する
そして特別券をミクに差し出す
「これ…」
ミクの目の前に差し出された紙が現実を物語っていた
「なかったら入れねえぞ」

仕方なくそれを受け取る

「行くか」

レンはエスカレーターに乗り上に向かう。ミクもそれに続きエスカレーターに乗る

エスカレーターを上がりきるとすぐに駅のホームだった

「まだちょっと時間あるみたいだな…コーヒーかなんかいるか？」

私は小さく首を横に振った

「そか…ならちょい飲み物買ってくるわ」

そういってレンが小走りで近くの自販機を捜す

ミクは遠目にそれを眺めていた

「…（これ、どうしよう）」

ミクは鞄から紙袋を取り出していた

「私ってやっぱり弱虫なんだな…嫌われるのが怖くて…」

自然と涙が溢れてきた

ミクは少し俯き、目を拭う

「お待たせ…ってあれ？どうした？」

レンが心配そうに駆け寄ってくる

「なんでもない…なんでもないから」
ミクは涙を拭い去ると笑い返した
「ならいいんだけどよ」
そういってレンが笑った時、駅にアナウンスが響いた
「8時27分発〜〜」
「もう来るのか…」
レンの一言がミクを追い込んだ
電車が着たらいやがおうでもお別れだ
「ただいま7番線に〜〜」
またアナウンスが流れる
7番線…レンが待っている線路だ
「じゃぁ…行くわ」
レンが立ち上がる
ミクは後ろを俯きながらついていく
「今までありがとな……ミクにはいっぱい世話になったよ」
レンは電車の入口に立ってミクに話し掛けていた
「うん…」

ミクはいつまでたっても俯いたままだった

「なぁ顔上げてくれよ…」

レンがそう言った時だった

ミクは踵を返し、エスカレーターの方へと歩きだそうとした

「待って」

レンはすぐにミクの手を掴んだ

「離してよ……」

ミクの言葉は一言だけだった

でもその一言には力がなかった

「いやだ…」

その言葉を聞いた瞬間だった

ミクの体の中で渦巻いていたモノが弾けた

「…（私はレンが好き、好きなんだ…この気持ちレンに届けたい…

…だから…だから今だけ、私に勇気を……）」

「あのね！？」

ミクは決心して声をかけながら振り向いた

振り向いた先には何かを言おうとしていたのかレンの顔が近くにあった

「あっ…」

レンが先にほうけたような声を出した

その瞬間ミクの緊張の糸は切れた

目から熱いものがぽろぽろととめどなく落ちる

「うっうぁぁ……ひっく…グスッ」

ミクは回りの目も気にせずに泣き出す

「ミク…」

レンは何も言わずにミクの肩に手を回し、抱き寄せる。

ミクはレンにしがみつき更に泣きじゃくる

その時間はゆっくりに感じられ長くも感じられた

ミクがある程度落ち着きを取り戻しだした

「ごめん……取り乱しちゃって…」

「いいんだよ……それと…はい…」

そういってレンは一つの紙袋を差し出す

「これは?」

ミクが困り顔で聞く

「開けてみな」

レンはいたずらっぽく笑う

ミクは紙袋にとめられたセロテープを剥がすと中からそれを取り出した

「これ…」

ミクが手にしていたのはさっきの店でミクがかわいいなぁと言っていた服だった

「俺からの最初で最後のプレゼントだよ」

レンは笑う

ミクはまた目の奥が熱くなるのを感じていた

「なら私も……」

そう言って鞄から紙袋を取り出す

「何々？」

レンが興味津々に聞いてくる

「今は開けないで…電車の中で開けて、下手くそだから」

ミクは視線を泳がせながら差し出す

レンはしっかりとそれを受け取る

「ありがとうな…ミク」

レンはその紙袋を大事そうに抱えると、入口から少し奥に入った

もぅミクは泣くことはなかった

「向こう行っても元気でね」

「元気が取り柄なのに、元気取ったら何が残んのさ」

「何も残らないわね…ハハ」

「ハハハッ…じゃあなミク」

「元気で…レン」

そしてタイミングよく発車のベルが鳴り、扉が二人を隔てる

だが二人の顔に悲しさや淋しさの色はなかった

「行ったか…」

一人ホームに立ち尽くすミクは渡された紙袋に視線を落としていた

「ありがとう……そしてサヨナラ」

ミクは電車とは逆方面に歩き出した

「そうだ…これ」

レンは座席でミクに渡された紙袋を見ていた

「なんだろ」

レンは紙袋の封を切り中身を取り出す
それはふかふかした黄色と黒のストライプのマフラーだった

「…ミク……」

そのマフラーを広げた時だった
一枚の紙が宙を舞いながら、足元に落ちた

「これ…手紙？」

～～レンへ～～
この手紙を読んでるってことは、私は少しだけ変われたんだな
まぁそんなのはさておき

マフラーどうかな？
気に入ってくれたかな？
とりあえず下手くそだから、何だったらごみ箱に入れてくれていいし～（笑）

向こう行ってもちゃんとやっていきなよ～
レンは人気あるんだし

たまには帰ってきて元気な顔見せてよね

さて私は歌手、あなたはドラマー…目指す道は違うけど……来年辺りには私達はどうなってるのかな～なんてね…

それじゃあまり長いのもダラダラするだけだから…

じゃあね

～～ｂｙ　ミク～～

「ミク……ありがとう」

レンがその手紙を折って更に気づいた

「裏にも書いてる」

～～レンへ～～

ごめんね…一つだけ付けたし

私……レンのこと

大好きだったよ

友達としても、一人の男の子としても

それじゃあね

～～ｂｙ　ミク～～

「ミク……」

レンの両頬には涙の筋が流れていた

「俺も…お前のこと……大好きだったよ」

そしてレンは泣いた……

Ａｆｔｅｒ　Ｓｔｏｒｙ

「さぁ今年最上級の歌姫、初音ミクさんです」

司会者の声がスタジオに響く

今日はレンと別れてから調度一年後の１２月２４日…夢だった歌手になれて早くも半年

むしろ半年でテレビにたくさん出れるくらいになるのは稀だとおもう

「皆さん、こんにちは。初音ミクです。今日は皆に盛り上がってもらいたいから～新曲いっちゃいます」

君との出会いがなかったら歌手なんて目指してなかった

君には感謝してるよ

今着ているこの服も君にもらったものだよ…デビューしたときもこの衣装だったよ

〜〜ありがとう〜〜

「新曲［初めての恋が終わるとき］です」

〜Ｆｉｎ〜

初めての恋が終わるとき（後書き）

いかがでしたか？

こんな感じで書いていこうと思います

正直ＶＯＣＡＬＯＩＤもディープな所までは知らないので調べたり

しながらになるかもですが楽しみに

基本既存曲をなぞるストーリーになりますので

Just be Friends（前書き）

やと書けた……

割に感動もしないし……

あんまり面白くない……

期待はしないでくださいねｆ^＿^；

出演者

初音ミク　×

鏡音リン　×

鏡音レン　×

巡音ルカ　ヒロイン

カイト　主演

Just be Friends

俺達どうしちまったんだろ……

君と出会ったのは、偶然だった。
大学の講義で一緒で、たまたま席が隣だっただけだ。
ピンク色の長い髪に、見とれてるの見られて、君に笑われたっけ。

俺はそんな君に、恋をした。

「あのさ……今日お昼暇かな？」

「お昼？　そうねぇ、うん。暇だよ」

「じゃぁどっかで一緒に食べない？」

「いいわよ」

君はなかなかフレンドリーで、見知らないだろう俺が声をかけても快く返してくれた。

講義は、お昼の事を考えていたからあんまり頭に入ってないや。
俺が、鞄に教材を詰め込む。

「そうだ！　俺、カイト。君は？」

自己紹介してなかったや。

「私は巡音ルカ。よろしくね、カイト」

そういって、笑う顔もかわいいや。

「うん。よろしくルカ」

二人は講義室を出ると、郊外に出た。

「何食べる？」

ルカは色んな店に、目を向けながら聞いてくる。

「俺はなんでもいいんだけど～ルカは？」

「ん～なら私のオススメに連れてってあげる」

その日のお昼はパスタを食べながら、他愛もない話に花を咲かせた。

講義中の事や、これからの事、話す材料はたくさんあった。

それから数回、デートと呼べるのかわからないが食事したり、散歩したり、一緒にいる時間が増えてきていた。

そんなある日。

「なぁルカ……」

俺は、恥ずかしいのを押し切って口を開いた。

案の定、君はキョトンとしたけど、返事をしてくれて。

「付き合ってくれないか？」

俺が発した言葉は、しっかり届いたのかな？

君は、唸りながら「どうしようか～」なんて言いながら、俺の周りをひとしきり回り、俺の前に来ると顔を上げて、ニッコリ笑ってくれたな。

「いいよ！」

その言葉が、今でも忘れられない。

俺の、胸の奥で響く声。

たまに俺ん家で飯食ったりもして、箸の持ち方がどうだらでくだらない喧嘩して、笑ったり。

馬鹿って言われたから、馬鹿って言い返して笑ってた。

あの頃が懐かしいよ……

そんなある日だった。

街をぶらついてると、君が見知らぬ男と歩いていたんだっけ。

その日の夜は、すごい怒鳴りあいで……

「あの人は誰なんだ？」って聞くと、君は言葉を濁してから応えたよね。

「……昔、仲がよかった先輩だよ」

「それなら何で、すぐに応えないんだよ」

それが、地雷だったんだな。

君は目に、涙を浮かべ始めて……

「もういいわよ！　カイトの馬鹿！」

そう言って、デートの時に、二人で選んで買った花瓶を投げ付けてくる。

それでも怒りはおさまらないみたいで、お茶の入ったグラスとか、弾き飛ばして家を出て行ったっけ。

それから、俺がどうしたか……

君は、知らないはずだ。

叫んだよ……

声が枯れるまで……

でも、君の名前を呼んでも、応えてくれる人はいない。

俺達二人を繋いでいた赤い糸は、儚くも切れてしまった。

「いくら口であーだこーだ言っても。結局、こんなもんだろ」

そういいながらも、俺の頬には涙が流れていた。
その日は、そのままベッドに入って寝た。

次の日、起きた俺は花瓶の処理やらで学校に遅れようとした。
ただそれだけが理由ではない。
俺は、会いたくないんだ……
ルカに……

でも、片付けは案外早く終わってしまい、学校にも余裕で行ける時間帯だった。

「はぁ……仕方ない。行くか」

俺は、重い体をたたき起こし、荷造りして家を出ようとした。
そこで、下駄箱に置いてあった花瓶にいけられた千日紅の花が完全に落ちている事に気づいた。

「変わらぬ愛を、永遠に……か」

俺はその花を物悲しげに見つめ、靴を履こうと手を伸ばす。
すると今度は、指先から赤い液体が流れている事に気づいた。

「……花瓶で、切ったか……」

そこで、ふと思った。

「……なんでだ？」

昨日まで、一緒に笑い合ながら過ごしてきた。
それが一瞬で、たったの数分の出来事で散った。
目の前の千日紅のように……

「ルカ……」

柄にもなく呟く。
それに合わせて、色んな思い出が込み上げてくる。
案外、料理が下手なところ。
案外、悪戯好きに見えて素直なところ。
案外、澄ました顔でいるけど、笑うと可愛い顔。
俺は、そこで壁を殴り付けた。

「なんでだよ……何がいけなかったんだよ！　くそっ！　くそっ！」

何度も、何度も壁を殴り付ける。
握りしめた拳から血が流れようが何ともおもわず、ただひたすらに壁を殴り付けた。
そうして何十回と殴って、うなだれた。

「……また、あの頃に戻りてぇよ……」

君が、無邪気に笑ってくれた。
あの頃に……

俺は、壁に頭をたたき付けた。
誰かに対する怒りではなく。
誰でもない、いじけた自分に叱り付けるために……

「よし、行くか……」

俺はすぐに靴を履き、鞄を手に家を後にする。

家を出てすぐ。
俺は、いつも待ち合わせしていた場所に差し掛かった。
そこに見知った姿が、電柱に体を預けるように立っていた。
俺はその人には見向きもせずに立ち去ろうと、少し歩を速めた。
すると、その人が声をかけてきた。

「カイト……」

ルカだ。
最も、会いたくなかった人。

「どうした？」

顔を向けずに、声だけで応える。

「昨日は、ごめん……」

ルカが本当に、そぅ思っているかは定かではない。
ただ、頭を下げているだけかもしれない。

「別に、何とも思ってないよ」
俺の言葉に、少しだけルカの雰囲気が明るくなった気がした。
「だけど……お別れだよ。ルカ」
その一言を聞いたルカは、一瞬に理解に戸惑ったのかリアクションすら取らなかった。
だが、数秒後に嗚咽を漏らしはじめる。
「もぅ、俺はお前の事を好きでいられない」
……嘘だ。
ホントは、離したくないと心から思ってる。
「だから……さよならだ……」
俺がつなぎ止めちゃ、いけないと思ったんだ。
だから……さよならだ。
俺はまた、歩を進める。
顔は見せない。
当たり前だ。
調子に乗ったことを言っている本人が、涙ダラダラだったらだらし無いし……
俺の後ろ辺りから、何かが倒れるような音がした。
目線だけそちらに向けると、ルカがその場に座り込んで泣いてい

た。

「じゃあな……（いい人を、見つけろよ。）」

俺は、そのまま振り向きもせずに立ち去った。

Ａｆｔｅｒ

それからは、一度も会わないまま今に至るわけで……

「はぁ……だるい」

俺は就職に向けて、就活並びに、卒研の課題やらで忙しい毎日を送っていた。

「今日は、ここで軽く食うか」

俺が入ったのは、パスタ屋。

このパスタ屋は、俺が大学一年の時点で既にあった。

「これ大盛りで……はい」

俺が頼んだのは、ミートソーススパ。この店のイチ押し。

この店は、俺が知ってた訳じゃない。

ある人に教えてもらって、たまに来る店。

カラン、コロン

「それでねぇ～あはは、うん」

うるさい客が入ってきたなと、入口の方を見る。
そこに入ってきたのは、一人の男とルカだった。

「あの時の……」

その男には、見覚えがあった。
あの時の男だ。

俺は、手近にいた店員を呼ぶ。

「すいません、ここのオーダーキャンセルで、急に出なくちゃならなくなったんで」

適当にごまかして店を出る。

「ふぅ……」

ため息をつきながら、出て来た店のドアを見つめる。

「じゃあな……元気で」

俺は、前を向くと、振り向きもせずに歩きだした。

〜Ｆｉｎ〜

Just be Friends（後書き）

どうでしたか？

一応友人に頂いた感想から男性視点だけでなく、あえて女性視点書いてみては？

なるほど……

その案頂き！

ってことで、明日辺りに貼れるといいなぁ～

では

感想、駄目だし待ってます

Just be Friends SIDEルカ～（前書き）

はい
言っていたルカ視点です

読む必要は無いに等しいですｆ^｜^；
書いてて……駄目だこりゃってなりましたしｆ^｜^；

恋愛感情に疎いのに書いていた罰か（▽｜；）

まぁ興味あれば覗いたってください
もち感想とかはお任せします（＜＿＞）

Just be Friends SIDEルカ〜

私達どうしちゃったんだろ……

君とあったのは、偶然だった。
大学の講義で一緒で、たまたま席がとなりだっただけ。
君はずーっと私の事見てて、ふと隣見てやると慌てて視線を反らす。
可愛い人だなぁって、ちょっと思っちゃって。
綺麗な青い髪、端正な顔立ちをした君。
私はそんな君に、恋をした。

「あのさ……今日お昼暇かな？」

そんな君が、小さい声で尋ねてきた。

「お昼？　そうねぇ、うん。暇だよ」

「じゃぁどっかで一緒に食べない？」

まさかのデートのお誘いとわね。

「いいわよ」

君は勇気があるんだ。
初対面の人に気安くナンパ出来るなんてね。
でもなぜだか話しやすい。

講義は、お昼の事を考えていたからあんまり頭に入ってないよ。
私が、鞄に教材を片付けていると、不意に声をかけられる。
「そうだ！　俺、カイト。君は？」
そういえば、自己紹介してなかったっけ。
「私は巡音ルカ。よろしくね、カイト」
そう言った瞬間に、照れ笑いをする君。
「うん。よろしくルカ」
可愛いなぁ。って、また思っちゃった。

私たちは講義室を出ると、郊外に出た。
「何食べる？」
私は、こんな体験初めてで、色んな店に目を向けつつも、何にするか迷い問い掛ける。
「俺はなんでもいいんだけど～ルカは？」
ん～煮え切らないな。よし
「ん～なら私のオススメに連れてってあげる」

その日のお昼は、私の行きつけのパスタ屋で食べることにした。
パスタを食べながら、他愛もない話に花を咲かせた。
講義中の事や、これからの事、話す材料はたくさんあった。
だけど、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

それからちょくちょくデートしたりして、一緒にいる時間が増えてきた。

そんなある日のデートだった。
カイトは、恥ずかしそうに下を向いたまま隣を歩く。

「なぁルカ……」

そんなカイトが、顔を赤らめつつも私を真っすぐに見つめて言葉をつむぎだす。
私はいきなりのことにキョトンとした。
なんとも私らしくない返事になってしまった。
恥ずかしいな……

「付き合ってくれないか？」

私が、聞いているのは空耳かな？
私は、一瞬理解に苦しんだが、一つの答えを導き出した。

カイトも好きなんだ。

私は、少し悪戯してやろうと。唸りながら「どうしようか～」なんて言って、カイトの周りをひとしきり回ってやる。
カイトの顔から、血の気が引いていくのが、目に見えてわかった。
私はカイトの前に立つと顔を上げて、ニッコリ笑ってあげる。

「いいよ！」

私が返したのはＯＫ。

私の、言った言葉。

それから、たまにカイトの家でご飯食べたりもして、カイトのお箸の持ち方がどうだらでくだらない喧嘩して、笑ったり。

馬鹿って言ってやったら、馬鹿って言い返えされて笑ってた。

あの頃が懐かしいよ……

そんなある日だった。

街をぶらついてると、見知らぬ男に声をかけられた、一緒にご飯食べないか？って……

私は断ってたのに……

無理矢理について来て、結局、ご飯だけ一緒して、別れた。

そしたら、その日の夜は、すごい怒鳴りあいになってしまった……

「あの人は誰なんだ？」って聞かれた、。

だけど、言いたくない……軽い女だって思われたくなかった。

だけど、いいごまかし方が見つからなくて、言葉濁しちゃって……。

「……昔、仲がよかった先輩だよ」

「それなら何で、すぐに応えないんだよ」

私って、馬鹿だな……。

自然と、涙が溢れてくるのがわかった……

「もういいわよ！　カイトの馬鹿！」

なんでだろう……

そう言って、デートの時に、二人で選んで買った花瓶を投げ付けてしまった。

なんでだろう……

八つ当たりだってわかってるのに、わかってるのに……

お茶の入ったグラスとか、弾き飛ばしてカイトの家を出た。

それから、私は夜道を一人で歩きながら、呟いていた。

「自分が悪いのに……」

カイトは悪くない、私が誤解を生んだから……

素直に言えばよかった。

偶然会った人だ！　って……

「でも、もう遅いよね……」

君は赦してくれないだろうし……

信じても、くれないだろうし……

また、涙が溢れてくる。

私達二人を繋いでいた赤い糸は、儚くも切れてしまった。

家に帰っても、何も思わない。

ただ、自分に腹が立ってきた。

明日謝ろう。そう思って、一人で泣きながらベッドに入った。

次の日、起きた私は、カイトより早く居られるように用意を済ませた。

場所は、カイトといつも待ち合わせをする場所。

どれだけ、時間が経っただろう。

カイトは、一向に姿を見せる気配がない。

「行かないのかな……」

私は、体を預けたままにため息をつく。

ふと、顔を上げた私の視界の端に、待ち侘びた人物が映った。

「カイト……」

その人は、私を無視するように早足になった。

「カイト！」

私の声が届いたのかな。
無愛想な返事をして、振り向いてくれる。

「昨日は、ごめん……」

赦してもらえないだろう……。
だけど、謝らなきゃならない……。

「別に、何とも思ってないよ」

カイトは確かにそういった。
私は、まだ希望はあると、思った。
だけど、カイトの口から次に出された言葉は、私を振り払うような言葉だった。

「だけど……お別れだよ。ルカ」

その一言を聞いた私は、一瞬、理解に戸惑った。
何が何だか、わからなくなってきた。
ただ、私達の関係は、終わってしまったんだって……。
それだけ、わかった。
私の目からは熱いモノが流れ出ていたのがわかった。

「もぅ、俺はお前の事を好きでいられない」

そうだよね……。
素直に言えばよかったのに……嘘ついてまで、隠そうとした。

「だから……さよならだ……」

自分がまいた種だ……

自分で刈り取るくらいの覚悟は、持たないといけない……

そんなの、わかってる。

だから……さよならだね。

そう思った瞬間に、次々と思い出が浮かんでくる。

アイスクリームを食べさせたら、すごく子供っぽくなったり。

料理がうまかったり。

すごく頭がよかったり。

そんな記憶が溢れてきて、次第に足から力が抜けていく。

私は自分の力で立つことが出来なくなり、その場にへたりこむ。

カイトは何も言わずに歩き出す。

私は、もうカイトのなにものでもない……ただの知り合いか、それ以下だ。

そんな私に、カイトを引き止める事なんか出来ない。

カイト……今まで、ありがとう。

Ａｆｔｅｒ

それからカイトとは、一度も会えないで今まできた……

「はぁ……」

私は、就職に向けて、就職活動と、卒業研究の課題とかで忙しい毎日を送っていた。

「お昼どうしようかな……」

そんな時だった。
声をかけられた。
振り向くと、あの時の男が立っていた。

「こんなとこで何してんの？」

私達が、別れるキッカケになった人……
だけど、もぅ今更だ……。

「お昼ご飯、どうするか悩んでた」

「じゃぁ、一緒に食べないか？」

「いいわよ」

私達はある店を目標に歩いていた、郊外にあるパスタ屋。
このパスタ屋は、私がずっと通っている店。

「私は、これで……はい」

私が頼んだのは、ミートソーススパ。この店のイチ押し。
この店に、愛した人と来た時にも食べたもの……。
あの人は、今も元気にしてるかな……
隣の男がかけてくる言葉を、適当にあしらえながら頭の中では、違う人の事を考えていた。

カイト……
私達の出会いと、辿ってきた時間は、無駄じゃ、なかったよね？
……

私には今、あなたはどこで何をしてるかは、わからない……
だけど、私は、あなたがずっと元気で……
素敵な人と出会えることを、願ってるよ。

ごめんね……
カイト……

本当に、大好きだったよ

〜Ｆｉｎ〜

Just be Friends SIDEルカ～（後書き）

いやぁ終わった

一つの黒歴史だよ……

てか前作二つでハードル上げ過ぎたのがまずかったのか（「▽」；）

否、断じて、否！　私の腕が悪かっただけ！

さぁて……

軽ーくネタに走ろうかなぁ～

次は～ぽっぴっぽー日本語Ｖｅｒ！　予定だぁ～～

予定は未定　ｂｙあんぎゃーす様　って言葉は忘れるなよ～！

ココロ～ココロキセキ（前書き）

今更出てきた著作権の話で少し改変した為読みにくくなっていると思います

途中途中の台詞内の「～」は歌っているものと思ってください

では

ココロ～ココロキセキです

ココロ～ココロキセキ

「もうすぐだ」

一人の科学者は薄暗い部屋でパソコンに向かい合いキーを叩いていた

「もうすぐだよ…リン」

科学者が目を向けた先には、沢山のコードを頭や肩に接続された一人の少女がいた

「いくよ…リン」

科学者がエンターキーを弾く

その瞬間パソコンの画面がホワイトアウトし、そこに黒い文字が浮かび上がる

［Ｋａｇａｍｉｎｅ－Ｒｉｎ－－ＳＴＡＲＴ　ＵＰ｜Ｓｅｔ～ＲＥＡＤＹ？－－］

科学者はもう一度エンターキーを弾く

またパソコンの画面は入れ代わる

［－－ＧＯ！！］

そう表示された途端、音を立てて少女を取り巻くコードが排出される

そして少女はゆっくりと目をあけ、科学者を見つめて口を開く

「おはようございます。マスター」
少女は科学者に挨拶をした
「おはよう。リン」
科学者も完成を喜び、目を細めて言葉を返す
この少女はリン、鏡音リンだ
鏡音というのは僕と同じ苗字
そしてアンドロイドだ
僕はレン…鏡音レン
科学者の端くれだ

リンを起動してから数年と数週間が過ぎた
この間にリンは色んな事を覚えてくれた
家事や生活、歌も…色んな事を学んでくれた

「リンおいで」
そんなある日、僕は広い庭からリンを呼んでやる
「なんでしょうか？マスター」
リンはすぐにやってきてくれた
「これを…歌ってみてくれないか？」

そういって数枚の紙の束をリンの手にのせる
リンは初め戸惑っていたが、その紙に書かれた言葉を読み取っていく
「わかりました…マスター。歌の準備をします」
リンは足にあるスピーカーのスイッチを入れる
スイッチが入ったのを知らせるノイズが一瞬走る
「すぅ……〜プロ…グラム？」
リンが歌に詰まる
歌詞を見ながら首を傾げていた
「どうしたんだ？リン」
「マスター、これはどういう意味でしょう？」
リンが指差しているのは「心を込めて」と書かれた場所だった
「そうか…君にはまだ早かったか」
僕はそんなリンの頭に手を置いてやる
そぅ、彼女はまだ完全じゃない…
見た目は奇跡に近い出来栄え、歌声は世界を魅了する声
それでも一つだけ…一つだけ足りないものがある
それは…「心」だ
どれだけうまく人に化けていようと「心」がなければただの物にな

ってしまう

「マスター？」

多分難しい顔をしていたのだろう、リンが不思議そうに顔を覗き込んでくる

「なんでもないよリン」

不安そうな顔をする彼女に笑い返してやる
すると安心したのか笑い返してくる

「…（この笑顔も……プログラムなんだな…）」

リンは笑顔を返してはくれる
だがリンには笑顔は笑うこととしか理解していない
笑うということがどういう事かを理解出来ていない

「（そうか……ごめんな…リン）」

その日から僕はまた部屋に篭りだした
食事時にリンが呼びにくると下に降り、リンが作ったご飯を口にする

「今日も美味しいよ…リン（これも…みんなプログラム…）」

「ありがとうございます。マスター」

「ごちそうさま…それじゃまた部屋にいるから…何かあったら呼んでね」

そういってすぐにリビングを離れる
多分彼女は悲しそうな顔をしてるだろう
だけどそれもプログラムの内だ

「…早く完成させないと」

レンは階段を早足に上り、自室にはいる
パソコンはつけたままで画面にはいくつもの設計図のようなものが並んでいた

「これを一刻も早くしないとな」

またキーボードをせわしなく叩く
そのたびにプログラムは一つずつ完成していく

「もうすぐだよ…ゴホッゴホッ……」

レンは口に手を当てる
ただの咳だと思い、またキーボードを叩きはじめる
だがただの咳ではなかった。レンが右手で叩いたキーボードが次々と赤く染まっていった

「これは……血か？」

僕は口を拭った
すると真っ白な白衣の袖は赤く染まった

「僕はもうそんなに長くないのかもな」

僕は自分の死期を悟ってしまった
もうそんなに長くない
一向にプログラムは完成することもなく苦悩はたまり、何日も何日も時だけが過ぎていった

「仕方ないか…」
僕は椅子から腰をあげるとリンを呼んだ
いつもどおりリンはすぐにきた
「リン…君に絵本を読んであげるよ」
僕は本棚から一冊の本を取り出し、表紙を見せた
「「ココロ」ですか？」
「そぅ…ココロだよ」
僕はリンにその絵本を読み聞かせてやった
リンはずっと聴き入っていた
そして僕がゆっくりと本を閉じる
「マスター、嬉しいとか悲しいとかってどういう意味ですか？」
「難しい質問だね～そうだな…例えば～リンが大切なものを取られた時は嫌な感じがしないかい？」
リンは軽く首をかしげる

多分彼女はわかっていないのだろう

「ん～じゃぁ…遊んだ時とかに楽しくならない？」

「マスター…楽しいというのは笑うということですか？」

そうか…

リン…君にはまだ心がなかったんだね……

「うん…そういうことだよ。それじゃぁリン、そろそろ夕飯の準備をしてきてくれないか？」

「はい。マスター」

リンは僕の部屋からトコトコと小走りで出ていく

「ごめんな…リン」

僕はまたパソコンに向かって最後のまとめに取り掛かった

万が一にもウイルスが入った時の事を考えセキュリティを固くしておく

そうすれば悪用される事はない、だがそのかわりに僕以外これを動かす事は出来ない

「よし…これで大丈夫だ」

僕は1番最後

プログラムを作る最後のチェックをする

「異常は…ない……か。よし、プログラム固定開始」

僕はまたエンターキーを弾いた
それとほぼ同時にパソコンに小さな枠が書き出され、そこに青色のバーが伸びはじめる

「これで…大丈夫……ゴホッゴホッ…ゴボッ？！」

僕は酷い咳に見舞われた
やむことのない咳
そして口からは夥(おびただ)しい量の血が吐き出され、部屋を赤く染めていく

「リン……ごめん…な」

自然と涙が流れていた
この時僕はリンが生まれてからの事を頭に過ぎらせていた

「リンが生まれたのは今から三年くらい前か…」

リンが最初に言った言葉は「おはよう」だった

「それから色々あったっけ…動物園行ったり、水族館行ったり…いっぱい遊んだね」

あの時のリンは確か…笑っていたかな

「一緒に寝たり、流しっこしたりもしたね」

二人で一つのベッドで寝たこともあったかな
あの時はリンが先に寝ちゃったんだっけ

「一緒に歌ったりもしたね」
作詞はほとんど僕がして、リンが歌う
たまに既存曲を歌ってもらったりもしたね
「孤独だった僕に…付き合ってくれて、……ありがとうね」
レンが倒れた拍子に机の上にあった書類等が降り懸かる
「ありがとう…リン」
「マスター。ご飯が出来ましたよ〜」
リンが呼びに来てくれたんだ
夕飯が出来たんだね
「マスター？マスター？」
リンが必死で僕の体を揺する
リン…もぅ寝かせて

「今日で僕が死んでから一年か…」
僕は今庭の木の根本にあるお墓に眠っている
「リンはまだ心を見つけていないんだな…」

僕の墓の前で佇むリンがいる
リンは墓がたってからずっと佇んでいる
くる日もくる日も毎日ここに佇む
だけど悲しむ訳でもない
泣く事のプログラムもいれてはいる…
だけど彼女はどうしていいのかわからないのだろう
泣く事が…悲しいという事がどういうことかわからないから

「心は完成しているのに…」

そんな風に考えた時だった
僕の後ろからまばゆい光が放たれた
僕は何事かとすぐに振り返った

「リン？」

そこにいたのは紛れも無くリンだった
ただ表情はどこと無く明るく感じられた
普通のリンからは感じられないような明るさが目の前のリンにはあった

「マスター。私を生んでくれてありがとう」

そういってリンは僕の両頬に手を添える

「私…マスターに生んでもらえてよかった……機械の私に生きる事を教えてくれた。だからね…私…マスターにありがとうを伝えたいの」

リンは微笑んだ
そのあと両頬に触れていたモノが消え、目の前のリンが光となって消える

「待っててね、マスター」

そんな声が聞こえる
それと同時に佇んでいたリンが何かを思い出したかのように顔をあげた

Ｓｉｄｅ　リン

「マスター」

私は佇むことしか出来なかった
でもなんでだろう？
わからないよ

私…これが…死ぬことがなんなのか…
……わからない……

そんな私の脳裏に手紙のような絵が浮かんだ

「何だろう…」

リンには機能の一つとして電子メールの受け渡し等が出来るようになっている
その機能を用いてメッセージが届いた

「…誰からだろ……発信者は……未来…の……私？」
その手紙の前に浮かぶ文字は［ＦＵＴＵＲＥ・ＲＩＮ］
リンからしたら単純過ぎる英語だ
［未来のリン］
私はそれを開いて中のメッセージを読む
「マスターからの贈り物？マスターの部屋にある」
正直何があるのかわからなかった
だけど行かなくちゃならない
私は急いで階段を駆け上がり、マスターの部屋に入る
すると何時からついていたのかパソコンの電源は入りっぱなしだった
「これのこと？」
私はキーボードを叩いた
するとあるファイルが開かれた
［ＫＯＫＯＲＯ・ＰＲＯＧＲＡＭ］
それを開くためには三つのパスワードが必要だった
多分マスターが私にもしものために備え付けたモノだろう
「パスワード…パスワードは」
当然知る訳もない
だがさっき届いたメッセージがさらに更新される

「パスワードは［ＫＡＧＡＭＩＮＥ' ＲＩＮ' ＲＥＮ］［ＫＩＳＥＫＩ］［ＫＯＫＯＲＯ］」

私は慣れない手つきでパスワードを打ち込んで行く
そしてみっつめのパスワードを入れた時、表示が切り替わった

［インストールを開始します。ケーブルを接続してください］

ケーブルとはパソコンから伸びている一本の端子の事だろう
私は耳にあたる場所にある、ヘッドホンのカバーを一つ外す
そこに端子を差し込んだ
するとまた画面が切り替わったが特に問題はなかった

［インストールを開始します。インストールが完了するまでケーブルを抜いたり、電源をきらないで下さい］

私はそんなものに目もくれずに待つ
マスターからの贈り物がなんなのかを知るために

［インストールが完了しました］

そう表示されたのは数分経ってからだった

「何だったんだろう…」

私が贈り物が何だったのかの詮索を始めた時だった
目元が熱くなっていくのがわかった

「何これ？…涙？」

目からこぼれる雫を拭き取りながら考えた
そしたらマスターが言っていた事を思い出していた

「涙は悲しい時に出るものなんだよ」

「これが…悲しい…？」

ずっとこぼれる雫は留まることを知らずにポロポロと流れ落ちていく

「あれ…とまんないよ……マスター…涙…とまんないよ」

私はその場に座り込んで泣き出した
これがマスターからの贈り物
私に決定的に足りなかったもの

心を得た私は今の状況がやっと理解できた

今まではマスターが死んでしまっただけだった
だけどそれは、とても悲しい事だった
それに今になって気づいた

「……そうだ、アレ」

私はマスターの机の上にある資料をどかせた
そして見つけた

「マスター…」

私はその紙の束を持ってお墓の前に行った

「マスター…ありがとう。これがマスターからの贈り物です」

私は足元のスピーカーのスイッチを入れる

「……〜〜「ココロ」」

Ｓｉｄｅ　レン

「リン……」

僕は墓の前で歌っているリンを見て泣いていた

「マスター…一緒に歌いましょう」

後ろから声をかけられ僕は驚いて振り向く

そこにいたのはさっき消えたリンだった

「もしかして君が？」

「そうかもしれないわ…それより、歌いましょう」

そのリンは僕の手をとり歌い出した

「「その瞳の中〜〜わからない」

そこまで歌った時だった

僕と一緒にいたリンを取り囲むように黄色い光が瞬いた

僕は眩しくて目をつぶった

しばらくして目を開けるとそこにはもうひとりのリンがいた

「マス…ター？」

もうひとりのリンは状況が飲み込めていないのか目をぱちくりさせている

「あなたも一緒に歌いましょ」

先にいた方のリンがわかっていないリンに手を差し延べる

「あなたは…未来の私？」

「えぇ…さっきメッセージを送ったリンよ」

僕は二人の会話についていけなかった

それは同じ者どうしの意志の疎通だからだ

「君達は面識があるのか？」

だから僕は二人に問い掛けてみた

「お話しただけですよ…マスター」

二人とも同じ言葉を返してくる

「そうか…よかった」

「さぁ…マスター、リン歌いましょ」

三人は手を取り、輪になって歌いはじめた

〜〜〜「「「アリガトウ・・・」」」

「マスター…」

歌い終わって初めの言葉は現実のリンの声だった

「私…マスターに生んでもらえて幸せでした」

そのリンの目からは涙がこぼれだす

「リン…僕も君が生まれてくれて、一緒に過ごせて幸せだったよ」

僕は泣き出すリンを胸に抱き呟いた

「マスター…」

その瞬間また辺りが光る
さっきよりも強く
そして私が目を開けた時にはもうマスターはいなくなってた
「マスター…」
そして突然起こったそれは悲劇的な事だった
脳裏に浮かぶ文字
――エラーが発生しました――
これは心というプログラムが余りにも強大過ぎて、オーバーロードしてしまったのだろう
「マスター…私はあなたに生んでもらえてよかった……ありがとう…」
それが私が発した最後の言葉だった
私は視界がゆらつくのを見届けながら前のめりに倒れ込んでいく
目に一瞬映ったのはマスターのお墓
それを見たリンは何故だが嬉しくなり微笑んだ
「また…一緒になれますね……」
……ありがとう……マスター

……私に生きる事を教えてくれて

～Ｆｉｎ～

ココロ～ココロキセキ（後書き）

次話の投稿まではまだまだ先になるかな……

なにせ歌詞入れたらＩＤ消されるとかいってますからね

意味わからない

今までなーんにも言ってなかった癖にね～～

ブラック★ロックシューター（前書き）

今回は順番入れ代わってブラック★ロックシューターになりました～
さてブラック★ロックシューターだからと言ってもマトやヨミはた
またＢ★ＲＳは出ません

あくまで歌をストーリー化したのでｆ＾＿＾；

ちゃんとわかるといいな～と思うております
よかったら読んでやってください

追記
陸上部を土台に書かせていただいてますが、友人談によるルール等
単語が多々あります。
もし間違っていたりしたら申し訳ないですｍ（＿）ｍ

ブラック★ロックシューター

衝撃！！陸上界期待のエース・ブラックロックシューター！！ここに倒れる？！

何となく開いたアルバムに挟まれた新聞の一面
それはある日の新聞の一面を飾った記事だった。

この記事が乗ったのは私が2年の時の夏だった。
私は陸上部に所属していたが、そんなにレベルは高くなかった。

団体戦では予選で落ちるのが当たり前くらいのレベルで、個人戦でも数人が残るか程度の弱小陸上部だった。

だけどその中で、私が本気で目指した先輩がいた。
この陸上部に居ながら全国の高校を抜き去る足を持っていた。
いくつもの高校から引き抜きの誘いがあったにも関わらず、すべてをことごとく断っていた。

その先輩の名前は紺野（こんの）　葵（あおい）先輩。
競技は短距離専門だけど、とてつもなく速かったりする。
１００ｍを１１'７６”で走りきることが出来る最速の名を冠するに相応しい人だった。

私はそんな先輩に色々教えてもらった。
あまり走りが速くない私に短距離走のノウハウや、トレーニング方法を教えてくれたり、すごくいい先輩でした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あの、今日からお世話になる黒岩（くろいわ）　歩（あゆみ）です。よろしくお願いします」

陸上部全員の前で新入部員全員が並んで自己紹介と挨拶をするのが毎年の恒例らしく、私も恥ずかしいのを押し殺して挨拶した。

「6人も新入部員が入ったのか。この部活、割と人気あったりするんじゃね？」

1人の先輩が言った一言に小さな笑いや呟きが聞こえたりする。
そんな中を小柄な女性が立ち上がった。
長い黒髪をツインテールで纏めた陸上部にしては珍しい色白の女性。

「初めまして。私はこの陸上部で部長をやっている紺野　葵です。陸上部へようこそ。改めて歓迎します」

そう言って笑った顔はすごく優しかった。

捕捉しておくと私は1年で紺野先輩は2年だが、この陸上部は3年は上がった時点でOBと言う扱いになり、2年に上がりたての後輩を育成するというシステムがあるため、2年の紺野先輩が部長をやっているのだ。
もちろん3年生は3年生でしっかり引退までは試合に出ているが、肩書上ですよ。肩書上。

それはさておき

入部したての私は何をしたら良いのか、何が私に向いているかもわからずにいたのを気にかけてくれたのが紺野先輩でした。

「黒岩さん、大丈夫？」

「あっ、紺野先輩……」

そう言って、私がちょっと俯くと、肩を軽く叩いて小さな声で「ついて来て」と言ってくれたので、ついていった。

紺野先輩に連れて来られたのはグラウンドの真ん中だった。

「あの、先輩？」

「ねぇ黒岩さん」

急に振り返った先輩にびくつきながら姿勢を正す。

「あはは、そんな畏まらないで、楽にして、楽に」

言われた私は軽く肩から力を抜く。

「黒岩さん。今あなたは何がしたいかを探してる途中かな？」

「はい……私あんまり運動神経良い訳じゃないんですけど、高校に入ったら陸上やってみたいなって思って。だけど、いざ入ってみると何をしていいか全然わからないですし……」

「そっか……ねぇ黒岩さん。一緒にロード行かない？」

「ロードワークですか？いきなり私なんかが行って大丈夫でしょうか？」

「そんないきなりおもいっきり飛ばさないから、ね？」

「はい。是非、お願いします」

正直私はこの時、走ろうなんて微塵も思ってなかったけど先輩のペースに乗せられてか頷いてしまった。

「じゃ先生少しロード行ってきますね」

紺野先輩は顧問の先生にそう伝えると薄い羽織り物を被り校門に向かう。

私も後ろをついて行く。

校門の前についた私は先輩に促され、屈伸したりジャンプしたりと軽く体を解した。

「じゃぁ、行こうか」

「はい。お願いします」

紺野先輩はゆっくりと走り出した。

私はそれに合わせて隣を走るように歩調を合わせる。

「たまにはこうして走るのもいいんだよ」

横目で私の事を気遣いながら話しかけてくれる。

「そうなんですか。あの、紺野先輩ってずっとその服着てるんですか？」

「私肌が弱いから、あんまり肌出してるとダメなの」

「それでも陸上を？」

普通、肌が弱いなら陸上なんて太陽の元で動き回る様な事はしないだろう。

「走るのが好きだから、お医者さんからも控えた方が良いって言われたりするんだけど、それでも走りたいから」

「好きだからですか……」

「そういう黒岩さんは走るの嫌い？って嫌いだったら誘った時に断られちゃってるか」

「はは、走るのは好きなんですけど、あんまり速くなくて長い距離も走れないんです。ジョギングで2キロくらいは楽なんですけど」

「ならさ、私と一緒に短距離走やらない？黒岩さんにピッタリかなって思うんだけど」

「短距離走……でも、私足遅いですよ？」

「走るのが好きならいいじゃない。一緒に走ろうよ」

そう言うと紺野先輩はちょっとずつペースを落とした。

「どうしたんですか？先輩」

「少し休憩。そこの橋で折り返しだから」

紺野先輩の指した方向には数百メートルとないところに橋があった。

「じゃぁ、私も少し休憩します。」

私達は2人して土手に座り込んだ。

春の終わり頃とは言え、放課後の川沿いは風が冷たかった。

「黒岩さん、さっきの話だけどね。答えは焦らなくていいの。私は短距離走を薦めたけど、他に紺野さんのやりたい事があったら強制なんかしないし、むしろ応援するから」

「はい……でもやっぱり私何を選んでいいのかわからないんです。走るのは好きだけど、速くないし……かといって砲丸や円盤投げって言うのは私球技とかダメだから無理だろうし……だから、私申し訳ないけど陸上部辞めようかなとか考えたりしてて。」

「そっかぁ……。あのね、黒岩さん足が遅い遅いって言ってるけど、実際私も遅かったんだよ。むしろ他の子の方が速かったんだよ。それでも私は短距離走を一生懸命にやってる。自分で言うと恥ずかしいけど、やっぱりそこに好きって言う気持ちがなかったら難しいんじゃないかなって思うの、私は長い距離を走る程の力はないけど走るのが大好きだから短距離に居るの。その代わり色んな事に挑戦して上を目指して行かなきゃダメだよ。そうじゃなきゃ居る意味がないからさ。試合に出て色んな速い人と一緒に走って、試行錯誤して自分を磨いていく。私はそういうのも好きだから尚更ここに居るのが楽しいの。黒岩さんはここに居てしたいことが本当にないのかな

？好きな事はないのかな？もし、何もないんだったら私は辞めてもいいと思う。それならもっと自分にあった無理のないものを選ぶ方がいいと思う。だけど、少しでもやりたい。好きだって言う気持ちがあるんなら、頑張ってみようよ。私でよかったらいつでも相談に乗るし。先輩に言いにくい事だったら代わりに伝えて上げてもいい。だから、好きって言う気持ちを無駄にしては欲しくないかな。って説教臭くなっちゃったけど、これが私の気持ち。」

先輩の言った事は私の中にズッシリと重たくのしかかった。
私は今まで自分に嘘ばかりついていた。
したいことを押し隠してまで流れに身を任せていた。

今回だってそうだ
私は走るのが好きだ
だけど足が遅いからやらない

それはただの我が儘でしかない。

「紺野先輩。私に、短距離走教えてくれませんか？」

そう言って顔を上げた私に、先輩は笑顔をくれた。

「もちろん。あっ、でも私も遅いから文句言わないでね。」

苦笑い気味に舌を出して笑う紺野先輩を見て、一緒になって笑う。

私達は立ち上がると、軽く伸びをして、もときた道を走り出す。

私は正式に紺野先輩の元で練習することが決まった。

たまにはミスして足を捻ったり、転んで擦りむいたりもした。
その度に私は立ち上がって練習を繰り返してきた。
それから半年を費やして、まともに走れる体になった。
その間も紺野先輩は試合で走り、記録を打ち出したりしていた。
「私は、どこまでやれるのかな……」
私は試合会場の自分の高校の仲間と水を渡しに回っていた。
それですれ違う人の顔を見ると、前に見た速かった人や、今回初めて見る顔の人等様々な人がいる。
私はその中に立ち尽くし、ただ周りの速そうな人達だけを眺める事しか出来なかった。

「あの、先輩……私達っていつから試合に出られるんですか？」
その試合の帰り、気になっていたことを問い掛けた。
「私達と同じなら来月辺りに新人交えた試合があったはずだよ」
「来月……ですか。」
「どおしたの？遠くて残念？」
「あっ、いや、むしろその逆です。早いなぁって……」
「大丈夫。私が全力でサポートしてあげるからさ」
「はい……頑張ります」

「よし。景気付けにカツ丼食べに行こう～」

「え？あっ、ちょ、先輩？！引っ張らないでください。先輩～」

そんな楽しい日々を越え、初めての試合。

「お前達新人は初の試合。いつもどおり走りきって感覚を覚えてこればいい」

顧問の先生はにこやかに皆を送り出す。

今までと違い、今日は自分も走るのだから緊張も半端じゃない。

私はおちつきを取り戻すのも兼ねて、ストレッチを始めた。

軽く足踏みして競技場の足場を確かめたりもした。

「〇〇高校、黒岩選手！」

自分の名前が呼ばれた。

私はゆっくり立ち上がり、顧問の先生に向き直って笑顔を見せた。

「先生、行ってきますね」

「おぅ、行ってこい。黒岩」

他の先輩達からの声援にも押され、試合場所まで向かう。

「〇〇高校、黒岩選手ですね。３番のレーンに待機お願いします。」

「はい」

私は3番のレーンに立つと、大きく深呼吸した。

初めて立つスタート位置。

学校とは違う地面。

私はスタート台に足を置く。

そこからは静かに時が動く。

スターターがゆっくりとホーンを掲げる。

それに合わせて腰を上げスタートの姿勢を取る。

私は首を上げ、向かう場所を見据えた。

刹那、ホーンからけたたましい音が響く。

それと同時にスタート台を蹴り、大きく前に出る。

そして私は無我夢中で走り、ゴールした。

結果8人中6位。

タイムは12'93”

先生は気にするなって言ってくれたけどやっぱり悔しかった……

そしてそれから半年の月日が経ち、私は学年が上がった。

そのあいたところ教室には新1年生が入る。

遂に私にも後輩が出来る時期になった。

紺野先輩は受験で忙しくなりだし、陸上部に顔を出すことも少なくなった。

私は心の隅に寂しい想いを押しやり練習していた。

そんなある日だった。

私は少しスタートのフォームを変えてみようと思い、スターターの間隔を調整してみた。

すると今までセットしていた距離より近い所に、更にしっくりくる場所を見つけた。

私はスターターに足を置き、スタートの姿勢を取る。

自分の中でイメージしてホーンがなるまでの一連の動作を行う。

「少し間隔狭いかも……」

内心そんなことを考えていた。

そしてくっと顔を引き締めるとスターターをけりだす。

いつもと違う着地だが違和感はない。

今まではスターターの距離が離れていた為に前に出る足が知らず知らずの内にブレーキをかけ、スタートの勢いを殺していたのだろう。

だがスターターの間隔を狭くすることで、足にかかる無理が少なくなり、自然な形で勢いに乗ることが出来た。

自分で測ると自己最高記録より０‐５も速かった。

「大発見かも……もう一本行こ」

私はその日何本も走り、そのスタート位置に違和感がなくなった。

私はそれを武器に１年最後の試合に出た。

そして私は異例の記録をたたき出してしまった。

１０'９７”

高校大会史上初１１秒をきったのだ。

そこから私の名前は全国に響き渡った。

そして私にはあだ名が付けられた。

その当時流行したアニメに出てくる少女。

彼女の名前はブラックロックシューター

半分語呂合わせなあだ名だがツッコミ入れるのも面倒だな……

黒岩＝ブラックロック

シューターは？

まぁ置いといて

私はブラックロックシューターと言うあだ名を全国に響き渡らせた。

そしてその試合を最後に私は進学、新入生が入学し、去年と同じく

数人の新入部員が入ってくる。

やがて毎年恒例の挨拶会が執り行われた。
だけどその場に紺野先輩はいなかった。
紺野先輩は自分の学力では少し難しい大学を専行したため勉強に励んでいたからだ。
私は心の奥で、自分に出来るのか？ちゃんと導いてあげる事が出来るのか等不安が一杯だった。
それでもストレッチの時や軽い準備運動の時には全力で取り組んだ。
後輩達に自分達の姿を見せられるように。
そんな日々を送り、試合も少しずつタイムを伸ばし続け、夢にまで見た国体への出場も決定した。
そんなある日、私は1人の後輩に声をかけられた。
「えと……黒岩先輩って短距離走でしたよね？」
私は声の主に顔を向ける。
彼女は今年入学した榊（さかき）　実（みのり）という子で中学の時から陸上部で長距離を主としていた子だった。
「榊さん、どうしたの？」
「私これから短距離もやろうと思うんですけど教えてもらえませんか？」
その瞬間私は言葉につまってしまった。
「ごめん……秋坂に聞いてくれない？秋坂も短距離だから」

私はどう教えていいのかわからなくなってしまった
私は今まで教えてもらうだけの立場だった。
だけど今の私には自信を持って教えられる事がない。
走ることに関しては教えてあげられるかも知れない
だけどどう言っていいのかわからなくなってしまった。
それからだ
私にたいする後輩達の声が冷たくなり始めたのわ。
「あの先輩速いだけでなんも出来ないよな～」
こんな言葉は聞き飽きるくらいに聞いた。
「何でしゃばってんだろうねぇ～いなくなればいいのに」
こんな言葉も聞き飽きた。
私は日に日に追い込まれていった。
そして私の気分はどんどんと沈んでいった
そのまま月日は経ち、不安を抱えたまま試合に臨んだ。
そこで事故は起こってしまった。
走り出した私に横で足をくじいた選手が倒れ込んできたのだ。
その選手の肘が私の膝を打った。
鈍い音が体中を響き渡った。

私は痛みに押し負け倒れ込む。
顧問の先生達が集まってくる。
口々に医療機器の名が飛び交う。
私はそのまま気を失った。

目が開いた時、そこは知らない部屋だった。
といっても独特な匂いで病室なのはわかりきっていた。
周りを見渡すと私の足には固い何かが纏わり付いていた。
「ギブス……あれ骨折れたんだ……」
私の頭を過ぎるあのシーン
倒れ込まれた私の膝を、肘が強く打ったシーン。
考えたくもない。
私の国体出場はほぼ不可能だろう
国体は3ヶ月先
だけどこの調子だとまずダメだろうな……
「紺野先輩……私どうすればいいんですか……」
私の目から一筋の涙が流れる。
それからは憂鬱な日々が続く。
毎日同じ様な料理が運ばれそれを食べては空を眺めて見る毎日。

時々同期の人や先輩、先生形もたまに来てくれる。
だけど1番来てほしい人は現れなかった。

私が入院して1ケ月が経った頃、ギブスを取って様子を見る日がきた。
先生の話によると良好だが国体は諦めた方がいいとのこと、例え出ようと頑張ってもかなりの訓練がなければ走ることは難しいだろうと……
それに下手をすれば更に悪化し、一生走ることが出来ないようになる可能性もあると言われた。

私は病室に戻り、言われた事を思い出していた。

「国体は諦めた方がいい……か」

私は国体の日に丸をしたカレンダーを握りしめた。
その紙の上にポタポタと雫が跡をつけていく。

「なんで……なんで……私なの…」

私は面会謝絶のプレートを入口に掲げ、ベッドに潜り込み、大泣きした。

その夜、落ち着いた私はプレートをしまいに入口の前に出た。
夜の病院は薄暗く怖い印象をうけた。

その中に黒っぽい服を着た人が佇んでいるのが見えた。

「どなたですか?迷ったならナース呼びますけど?」

「黒岩さん……遅くなってごめんなさい」
その声にハッとする。
「紺野先輩……ですか？」
「うん……一段落ついたから来たんだけど、面会謝絶って書いてたから」
「先輩、あのここじゃなんですから中にどうぞ」
「ありがと、お邪魔するね」
私と先輩は病院に入り扉を閉めた。
「これ、果物だけど何がよかったかわからなかったから」
紺野先輩が差し出した包みを受け取る。
その包みにはたくさんの果物が入っていた。
「先輩……ありがとうございます」
「先生に聞いたけど、残念だね」
紺野先輩が俯いているのが暗がりでもわかった。
「私ね新聞の記事を見て知ったの、これ」
紺野先輩が開いた一面に書かれた文字

衝撃！！陸上界期待のエース・ブラックロックシューター！！ここに倒れる？！

「これ見た時に行きたかったんだけどね……ごめんね」

「いえ……大丈夫なんで」

「それより国体はどうするの？諦めるの？」

「お医者様に言われたことによれば難しいって」

「そうなんだ……でも黒岩さんはそれでいいの？」

「私は……」

口ごもってしまう……

私は出たい

夢にまで見た舞台に立ちたい

「私は……」

だけど

望みは薄く、下手をすれば一生走れなくなる……

「私は……」

どうしたいんだろう……

「私は、出たいです……」

私の目から涸れたと思っていた涙が溢れてくる。

「私は出たいです……どんな訓練も我慢してでも出たいです。……私今日まで色々言われてて……自分このままでいいのかなって……でもそれでもやっぱり国体に出たいです……」

「そか……私、また黒岩さん諦めちゃうんじゃないかなって思ってたけど……よかった。勇気出して、辛くなったらいつでも言ってくれたらいいから、私なんかで力になれることならなんだってする。だから勇気出して頑張ろ？」

紺野先輩は私に笑いかけると窓際に立った。

「先輩……ありがとうございます。私勇気出して頑張ります。」

「うん。私はあなたのことを応援するよ。だから頑張ってね」

「はい……はぃ…ぅぅ……ぅぁぁぁぁ……あぁ……」

私は布団を手に泣き出した。

そんな私の肩を紺野先輩は抱き寄せる。

私は紺野先輩の体に縋り付き、また声を上げて泣いた。

今まで打ち明けることの出来なかった思いを打ち明けられたことで、自分の中にあった蟠りが解けたのだ。

それからは辛くて長い日々が始まった。

最初は痛くて辛かった。

だけど段々と慣れてきた。
でも歩く訓練はかなり苦しかった。
それでも国体を目指して頑張りつづけた。
そして私は遂に退院の日を迎えた。
予定より2週間も早く、少しながら練習する時間も取れる
退院の日はたくさんの人が出迎えてくれた。
私は家に戻ると、様子を見に学校に向かった。
「ん？あっ歩ちゃんじゃん、退院したんだ」
校門の前で部活帰りの友達に会った。
「うん……久しぶりだね。今日も陸上部やってるかな？」
「うん、やってたよ～見に行くの？」
「うん、一応退院したのの報告にね」
「そうなんだ～じゃぁ明日からはまた学校で会えるんだね」
「うん。明日また学校でね」
「おぅおぅ～じゃぁまたね」
友達と別れ、私は陸上部に向かった。
「先生」

「おっ、黒岩じゃないか。大丈夫なのか？」

「はい……あの先生、私まだ国体……」

「黒岩……お前」

「私……どれだけ無茶しても国体出たいんです。私の夢ですから」

「そうか……だが、無理はするな……病院に行った時に言われたが、無理をすれば一生走れなくなるかも知れないと言われたからな」

「はい……無茶はしないようにします……明日からまた練習出ますので」

その日はそのまま帰る事にした。

次の日、私は陸上部の部室に向かった。
まだまだ本調子で走る事が出来ないので軽くジョギングをする程度に走ることしか出来ない
だけど少しでも練習しなければダメだから……

私は少し離れた所で準備運動する。
そして軽く走って流す。

そんな練習がずっと続いた、だがやはり紺野先輩は練習には来なかった。

だけど心の中では紺野先輩が応援してくれてるような間隔があった。

そして国体の日がきた。
私はユニフォームに着替え、体をならす。
私が体を慣らしているのを見て、周りの学校の人が見ていくのがわかった
だけどそんな事を気にする事もなく、準備を続ける。
そして私が走る番がきた。
私がレーンに立つだけで周りの学校がどよめきをあげる。
「ブラックロックシューターじゃん……国体無理とかいってたんじゃないの？」
「でもいるじゃん！」
私の存在が信じられない人がたくさんいるのだろうか？
まぁいい
私は全力で走るだけ
夢に見た舞台で走れるんだから
私は足をスタート台に置き、位置を整えた。
そしてスターターがホーンを構える。
私は腰を持ち上げ、スタートの体勢をとる。
それだけで足が悲鳴をあげる。
私の顔が痛みに引き攣る

「頑張れ！！」

聞き覚えがある声が響く、その方向にいたのは紺野先輩だった。
メガホンを片手に大声でさけんでいた。

「先輩……」

私は泣きそうになるのを必死に堪え前を見据えた。
ゴールラインの先にある場所を

ホーンが音を響かせた。
私は痛い右足で蹴り出し、前に踏み出す。

綺麗に着地し、そこからはスピードをあげていくだけだった。
私はまっすぐ、ただまっすぐに走った。

ゴールテープが後数メートルに迫った時、私の足が限界を超えた。
私の右足からは力が抜け、前のめりに倒れそうになった。

その横を他のランナーが走り抜けて行く。
私はその後ろ姿を1人、コースの上で倒れ込みながら見つめた。

次々とゴールラインをこえていくランナー達。
私は見守っている事しか出来なかった。

だけど
悔しくて目頭が熱くなってきたのがわかった。

そんな時だった。

私の腕を担ぎ上げ、立たそうとしてくれた人がいた。
私はその人の事をしっかり見据え、その名前を呼んだ。

「紺野……先輩」

「黒岩さん……後少しだから、頑張ろう」

紺野先輩が私に笑顔を向ける。
私の頬を熱い雫が流れ落ちた。

私は無心になり首を縦に振り、紺野先輩に支えられ歩き出した。

その姿を見た私の学校のメンバーが次々とコースの際まできて応援してくれて、中には私の愚痴を言っていた後輩達までもが並んでいた。

私はそんな仲間を見て更に胸が苦しくなり、唇を噛み締めた。

その姿を見た他の学校の人達も立ち上がってまでゆく末を見守ってくれた。
中には他校であるにも関わらず応援歌を奏でてくれる応援部もあった。

私はその時、初めて人の温もりと言うものに気づかされた。
いや、今までにも温かさはもらっていたが気づかなかっただけだろう。

私は紺野先輩と一緒になってゴールした。
ゴールした私は、紺野先輩に抱き着き、また大声をあげて泣いた。

タイムは48'38”
酷い記録だった
だけど私は満足だった。
一生に一度の最高の思い出になった。
悲しいことに、紺野先輩はこの国体2年後、持病が悪化し、亡くなった。

私は紺野先輩と出会うことで勇気を手に入れた。
一歩ずつ前に進む勇気。
自分の意志を貫く勇気。
そして人の温かさももらった。
だから今の私がいる。

そして今、私は大学から就職への道を歩んでいた。
今までならまた流されて知らず知らずの内に決まっては失敗しただろう。

だが今はもう違う。
私は勇気をもらったから
自分の意志で前に進めるから……

だからどうか見守っていてください。
これから始まる私の物語を……

紺野先輩……

§§§§§Fin§§§§§

ブラック★ロックシューター（後書き）

いかがだったでしょうか？

久々の歌スト更新
ただ何が言いたいの？みたいになったかたもおられるかも知れませんがね
そこはご愛嬌でお願いしますｆ＾＿＾；

Ｂ★ＲＳはＤＶＤ等でアニメ化され始めていますが今回は違う視点といいますか、違う設定で書いて見ようと思ったのが事の始まりなわけでね

まぁいいんですが
もし文句などありましたら言ってくださいｍ（＿）ｍ

では
また

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0663s/

歌とストーリーが交わる奇跡

2011年10月22日03時13分発行